

CONTENTS

緊急連載『ARCHITECT』は必要ですか?.....矢田義典 2

自作自演226 平石ゆりえ 3

わたしのとっておき⑤ 牧ヒデアキ 3

再録 識者12人への建築家職能インタビューを終えて 4

上石津の里山風景と鮎料理を満喫 寺下 浩 6

JIA三重発 福島復興住宅視察
災害後を考える「復興住宅」・「仮設住宅」視察 豊田由紀美 7

JIA静岡発 第2回JIA塾
ヨーロッパの絶景とアジアのまちなみ 大橋康孝 8

JIA三重発 会員研修
実用的な木部塗装研修 服部昌也 8

愛知発 NAGOYA Archi Fes連続レクチャーvol.3「吉村昭範」
建築をつくるときに問いと答えはどこにあるの? 吉元 学 9

JIA愛知発 JIA建築ワークショップ@豊橋(7月24日~26日)
「気づきの瞬間」に出会う楽しみ 黒野有一郎 10

JIA愛知発 住宅研究会 近畿支部交流会
4つの住宅を巡る 竹中アシュ 11

理事会レポート 矢田義典 12

東海支部役員会報告 吉元 学 13

保存情報 第203回 飛騨古川の酒蔵 山田正博 14
カフェ&バル庄九郎(旧竹田家はなれ) 野口和樹 14

Bulletin Board 15

地域会だより 15

編集後記 鈴木利明・城戸康近 16

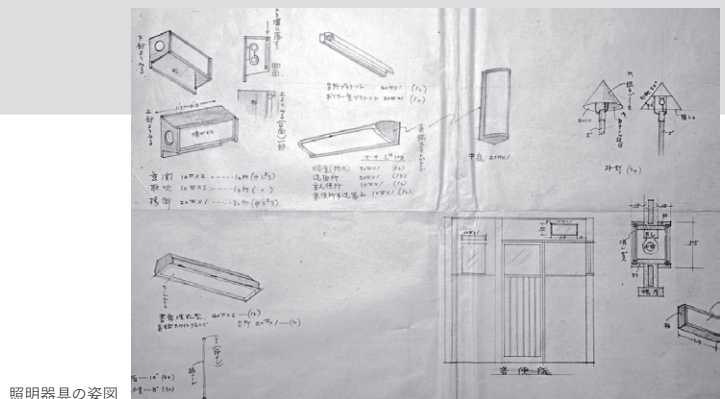
設計図は語る 7

静岡市中心市街地の数寄屋住宅

田中忠雄建築設計事務所(1940[昭和15年]設立)

この住宅は1955(昭和30)年、静岡市の中心市街地に建設されている。戦後10年、建築資材が不十分で当時の図面からは工業化された建築資材は極端に少なく、ほとんどにわたって手づくりの時代であったようだ。建築の収まり図以外にも家具や建具、照明器具や床下配管図まで詳細が描かれている。1つの住宅づくりに込める気概のようなものを感じる。残念ながらこの建物は、都市開発等の環境の変化に耐えられなくなり、存在していない。

戦前東京の渡辺仁事務所勤めていた田中忠雄は、1940(昭和15)年の静岡大火と共に静岡に事務所を構え、開業した。建築士の存在さえ不確かな地方の時代、田中忠雄という建築家に全てを託していただいたクライアントの意気込みに感謝したい。



照明器具の姿図

所在地…静岡市鷹匠町
竣工…1955(昭和30)年
構造…木造一部鉄筋コンクリート造
規模…敷地183.6坪 木造平屋建て63.7坪 RC造5.0坪
設計・監理…田中忠雄建築設計事務所
施工…勝呂組

田中楯夫(JIA静岡) | 田中忠雄建築設計事務所



ARCHITECT存続の危機!?! / ついに休刊!?! / 30年の歴史に幕、廃刊か!?!

ご意見下さい、会報誌『ARCHITECT』は必要ですか？ 東海支部会員のみなさまへ重要なお知らせです

JIA東海支部会員の皆さまには、日頃より支部活動にご協力、ご支援いただき、心より感謝申し上げます。

ところで、会員の皆さま、「緊急連載 – ご意見下さい、会報誌『ARCHITECT』は必要ですか？」をご一読いただけたでしょうか。8月号、9月号に掲載してある文面は大袈裟なことではなく、現在『ARCHITECT』は瀕死の状態なのです。理由は大きく分けて二つです。一つ目は、予算の問題です。『ARCHITECT』は会報誌であり、皆さまの会員サービスの一つですから、多少の赤字は構いません。ただ、今年度より編集費用がかなり増額し、現状のままでは維持することが困難な状況です。この件に関しては会員の皆さまにお諮りする問題ではないのかもしれませんが、支部会報委員会を中心に現在編集依頼をしている編集社から他の編集社への変更も視野に入れて検討をしています。30年を超える付き合いもあり、JIA東海支部と現在の編集社との間には、少し甘えが生じていると感じています。来年度の編集に関しては、現在編集をお願いしている編集社を含め、数社によるヒアリング、入札を実施する予定です。現在、数社には具体的な内容を含め、ヒアリングを済ませ、『ARCHITECT』を維持することが予算の上では可能であると実感しています。ただ、予算の中には「広告」に関する問題があります。『ARCHITECT』の編集費用は、そのほとんどを賛助会（法人協力会）さまによる広告で賄っていることをご存知でしょうか。今回は、この「**広告**」に関する部分にまで切り込まなければ『ARCHITECT』の存続は難しいと考えています（例えば、「ゼネコン」による**広告掲載**は難しいのでしょうか?）。すでに、この件に関しては、JIA東海支部内でもダブルスタンダードとなっており、必ずしも、『ARCHITECT』のみが聖域であるとは考えていません。『ARCHITECT』を維持することが最良であると考えるのであれば、多少の傷みを伴う改革は必要ではありませんか。

二つ目は、原稿の問題です。現在の『ARCHITECT』は理事会、役員会、事業などの報告が中心で、「**面白くないのではないですか?**」。また、興味が無いからなのか、「原稿の書き手が限定されている」ことも大きな問題です。今後『ARCHITECT』を維持する上で、「**誌面の改革**」、「**会員の皆さまが積極的に投稿したいと思わせる会報誌**」へとリニューアルすることは必然だと考えています。皆さま、「建築家憲章」の中に「建築家は、たゆみない研鑽によって自らの能力を高め役割を全うします。」といった文言が入っていることをご存知でしょうか。「**研鑽とは、なんでしょうか?**」。勉強することや建物を設計することでしょうか。私は、**自分の「考え」、「理念」を言葉（文章）にすること**だと思っています。「**建築家は語る（発信）べきではないですか?**」。ぜひ、『ARCHITECT』で皆さまの考え、意見を戦わせませんか。JIAは、「**自主自律**」の**団体運営**を行っています（行っているはずですが）。そのような団体だからこそ発信できることがあるはずですが。

『ARCHITECT』は昨年、創刊30周年を迎えました。創刊当時の理念は崇高で、記事にも刺激的な内容が多く、東海地方の建築文化向上に貢献したことは紛れもない事実です。だからこそ、『ARCHITECT』について、いま一度、考えてみませんか。『ARCHITECT』は**私たちJIA東海支部にとって大切な、「宝物」**なのです。『ARCHITECT』が再び輝きを取り戻し、東海地方のさらなる建築文化向上に貢献することが私の希望です。

文章の中にはあえて、「**刺激的**」な内容も記載しています。今回の記事を一読いただき、会員の皆さまからの忌憚なき意見をお待ちしています。『ARCHITECT』についてぜひ真剣に考えて下さい。よろしくお祈りいたします。



矢田義典 | JIA東海支部支部長

継続、休刊、どのような結果になっても、これまで30年続いた
『ARCHITECT』の今後について会員全員で議論しましょう!!

（次回連載は「創刊当時の経緯」の予定です）

※『ARCHITECT』の今後に関するご意見、ご提案などをいただける方は、FAXまたはeメールにてJIA事務局までご連絡ください!!

返送先: JIA東海支部事務局 FAX: 052-251-8495 / メール: shibu@jia-tokai.org



平石 ゆりえ (JIA 愛知)

FS&Ps / エフズ アンド ピース (名古屋市瑞穂区田辺通1-6-501 TEL 090-1983-1757 FAX 052-832-5156)

「宮脇檀」

7月に「宮脇檀 手が考える」を観に行った。学生の頃西早稲田に住んでいたのだが、自宅前の狭い道を挟んだほど近いところに「松川ボックス」が建っていた。道から少し奥まったところに赤い門があり、いつも横目で見ながら大学に通っていた。門が少し開いていたこともあったが近づいて見る勇気はなかった。その頃は宮脇さんが病気になることなど全く考えられなかったし、松川ボックスもそこに変わらずあり続けると思っていた。今では様子が全く変わってしまったので、勇気を出して見ておくべきだったと後悔している。

宮脇さんが亡くなった時のことはよく覚えている。当時私は出江事務所所属していた。出江さんは宮脇さんの訃報を聞き、とても驚愕し落胆していた。多くの建築に携わる人たちが、同じように落胆、失望した日であったのだろう。

巡回展にあった宮脇さんの所員さんとの筆談には心を動かされるものがあった。声を発することができなくなった時の筆談。病室で所員さんと打ち合わせをしていたのであろう。「担当者の仕事は俺に聞くことではなくて自分で考えて、こうしたいのですがという案を出すこと。何もかも聞くな」。この言葉は非常に重く、いつの時代でも師弟関係はこうあるべしと思う。当時、この言葉を所員さんがどう受け止めたのかは計り知れないが、私はこの言葉の中に宮脇さんの大きな思いと愛を感じた。そういえば私たちもよく出江さんに言われたものである。「考えろ」、「頭を使え」と。当時はただただ叱られている思いしかなかったがもしかするとそれも愛であったのか(?)と今更ながら思い出した。

わたしのとっておき ⑤

石上神宮 (国宝)

摂社出雲建雄神社 (国宝)



牧ヒデアキ

JIA 愛知
makira DESIGN

所用のついでに付近の国宝を見てくる「ついでに国宝」ということをしている。昨年末には奈良の石上神宮を訪れた。別の場所で手に入れた無料パンフレットに掲載されていたお陰で見ることができたのだが、(あくまでついでなので)いつも予習せずに国宝と対峙することになる。知識に頼らず感覚で楽しみながら、存在感や空間演出と時代・構法・材料・寸法・施工方法を含めた情報が同時に目と頭に入ってくる。そしてそれらを全身で受けとめる。(解説文を読んでわかった気にならずに、時間を使って対峙する。) 国宝を見ると、いつも自分自身が試されていると感じる。



石上神宮 (奥に国宝の拝殿がある)

駐車場から割と近くに拝殿(国宝)がある。石上神宮は七支刀が祀られていることで知られているが、門をくぐると視界からはみ出すほどのスケールで国宝の拝殿が存在していた。こういった意図的に距離感をコントロールする演出は、国宝の寺社に見受けられるが細部までの建築の出来が見事であると気配が漂い迫力が増す。建築と仏像の関係・建築と庭の関係でも同じように感じる場合が多々ある。

その向かいに摂社出雲建雄神社(国宝)があるのだが、この唐破風の屋根が乗った透け感のある建築は特に見応えがあった。中央のくり抜かれた通路の上部も屋根同様曲線が使われ少し華奢な部材で構成されてお



摂社出雲建雄神社 (国宝)

り、建具格子の上部は素通しで、漆喰壁と相まって、屋根を浮かせて見せるのに効果的だと感じた。当時は棟梁が設計者を兼ねていたと思われるが、空間的な感性と演出と施工を含めた技術が一人の人間の中で一体となっていたことに、現代を生きる人間として心打たれる。そして何かしらの価値を感じる人々によって、何百年という時間を超えてきているのである。静かに国宝と対峙していると、これらの建築をつくり上げた当時の人々の精神や人間性を感じられるような気がしている。

◎ data

石上神宮 (いそのかみじんぐう)
所在地 | 奈良県天理市布留町 384
アクセス | 東海地方からは東名阪道を使うとアクセスしやすい。

再録 第1回

識者12人への建築家職能インタビューを終えて -No.15/89.12月号掲載-

1988年11月号[2号]から1989年10月号[13号]までの12カ月間、『建築および建築家職能について、建築の外側にいる各界の識者がどう認識を持っているのか?』を主題に、『ARCHITECT』創刊の立役者である鋤納忠治会員による各界の識者12人へのインタビューが掲載されました。総48頁におよぶ記事は、当時の建築界、建築職能に対して、多様な示唆に富み、深く鋭い指摘もあり、今の私たちが現在の視点で読んでも、大変読み応えのある連載です。(全12回のインタビュー記事が掲載される89年10月号までの『ARCHITECT』は東海支部HPにてpdf形式でご覧いただけます。ぜひご一読ください)

今回の再録は、インタビュー終了後、89年12月号に掲載された、建築ジャーナル杉浦登志彦編集長による鋤納忠治会員への12回の総括を兼ねたインタビュー記事の抜粋です。

■12人の識者 ※勤務先・役職はインタビュー当時

88.11:須田寛氏—東海旅客鉄道代表取締役／88.12:小出忠孝氏—愛知学院大学学長／89.01:宮崎秀樹氏—医師・参議院議員／89.02:横越英一氏—愛知県立大学学長・政治学者／89.03:月尾嘉男氏—名古屋大学建築学科教授／89.04:水野宏氏—名古屋大学名誉教授・公衆衛生学者／89.05:海部俊樹氏—衆議院議員(8月に内閣総理大臣)／89.06:武藤三郎氏—中部大学教授／89.07:石塚直隆氏—医学者・元名古屋大学学長／89.08:加藤卓男氏—陶芸家／89.09:水谷研治氏—東海銀行常務取締役調査部長／89.10:小山齊氏—名古屋弁護士会会長

■JIA への認識はない

—鋤納さんには、建築界を外側から見るという視点で、建築家職能や建築の抱える問題について、12人の識者にインタビューをしてもらいました。

鋤納 ひとことでいって、建築家のイメージというか、JIAというものの認識が、ほとんどなされてない、というのが実感です。予想していたよりも、その点はガッカリしましたね。

私は平常、仕事の上で、建築の設計を発注するサイドのお役人さんとか、一般の会社の営繕を担当する人などとの付き合いがあります。そういう人たちは、かなり長い時間実務で建築をつくってききますから、建築界の仕組みみたいなものがかなりわかっています。けれども、それをいわゆる建築家集団という職能の立場で捉えるというのは、また随分違うことだなという感じがですね。

いくなれば、JIAが、世の中でひとり相撲をとっているような感じですか。

—インタビューに登場していただいた方々は、みなさん建築に対する強い関心を持っておられました、これは予想以上でしたね。

鋤納 それは、こちらは建築協会という立場でインタビューしていますからね。これだけの識者の人ばかりですから当然のことです。むしろ、それでも私は、建築の仕事の成り立ちみたいなものの理解度は低いと思いますね。

いわゆるヨーロッパの古建築だとか、日本の桂離宮だとか、要するに、絵画・彫刻と比べられる芸術的な建築とか、スカイスクレーパーのような超高層建築に代表される建築の技術的な側面などに対する関心は、随分あるのではないですか。

しかし、私から見ると、そこに建築家がいったいどう登場してどう関わっているか、どういう戦いをもってそういうものは成り立っているか、という点にまで関心を持っておられる人は少なかったのではないのでしょうか。

■忘れられない海部インタビュー

—海部俊樹総理大臣へのインタビューでも、海部さんは建築に対する関心をお持ちでしたが、建築家に対する理解には欠けておられたように思います。

鋤納 建築を文化的に捉えておいでになる。政治家でありながら、文化人で非常な見識を持っておられると思うのですが、やはり話の中に出てくるように、一級建築士即建築家という理解のされ方ですね。設計をする人、工事をする人、官庁で監督をしている人、等というような職能上の区別みたいなことは、これだけの識者でさえ難しいということなのでしょうね。

—JIAは、市民に理解を求めると同時に、政治家にも理解を求めるとして、政治資金をつかって協力を求めるというやり方ではなく、この国の文化や未来のためにという視点から、具体的に講ずる必要があるのではないのでしょうか。

鋤納 そう思います。そのためには、まずは建設省だと思えますね。そこで議論されないことには、一般市民に理解を、といっても、ちょっとピントが合ってこないと思いますよ。一般の市民に理解いただくのはいいけれども、建築職能の理解といっても結局は法制化しようということなんです。行政に対する直接的な働きかけがないことには、大衆運動でやれることはないと思います。

■「建築家」とはいったい何か

—そうですね。では制度化、職能確立のためのよい戦略はあるのでしょうか。

鋤納 私は、絶望的というといけませんが、かなりそれに近いという感じを持ち始めました。今度JIAが「建築家職能原則五項目」というのを出しましたね。それも結構ですが、その元の「建築家」というのはいったい何なのかということがよくわからないままに、職能原則五項目といってもはたしてどのくらい理解してもらえるのか。建築家協会

上石津の里山風景と鮎料理を満喫

8月3日、JIA東海支部持ち出し役員会が岐阜県西濃地区(大垣・養老・上石津)で行われました。当日の気温が40度近い猛暑だったため、見学を予定していた養老天命反転地は断念し、大橋家住宅、野原邸、上石津郷土資料館、日本昭和音楽村を見学しました。

寺下 浩 (JIA岐阜) |
寺下浩一級建築士事務所



■大橋家住宅(輪中建築)

最初に向かったのは県重要有形民俗文化財に選ばれている大橋家住宅です。内部は非公開で外部のみの見学でしたが、その壮観な佇まいには驚きました。輪中建築のため、敷地全体が周囲から1m程度嵩上げされた地盤上に建っており、緊急時に使用される水屋はさらに高く3m程度嵩上げされています。当時の浸水高の凄まじさが思い起こされます。この住宅は国道近くにあり、周囲には規模の大きな建物もありますが、塀をめぐらせた屋敷構えと母屋の大きさは今でも目を引く巨大さです。建設当時においては周囲の建物に比べ圧倒的な存在感を放っていたことは想像に難くありません。

■野原邸(個人住宅)

養老山脈にほど近い数千坪という広大な敷地に建設中の邸宅です。外観からして独特な印象を持つ邸宅でした。内部は高価な木材、石材がふんだんに使用され、全ての照明、家具が特注で、既製品と思えるものは一切ないように思われ、庭園も途方もない広さで

した。敷地内には庭園に使用する巨石(3~5m程度)が多数積まれており、ありとあらゆる素材、空間に圧倒されました。建築様式は基本和風と思われそうですが、一般の「建築」という範疇から離れた独特の世界が広がっていたように思います。何年もかけて施工し、計画・デザインもお施主様がされているようでした。最近新たに隣地を購入し増築予定とのことですがいつ完成するかは全くわからないそうです。この見学後、建築史家の倉方俊輔氏が「建築という概念は伝統的に日本にはない。建築家もいないし建築もない。」とある対談で仰っていたことが頭をよぎりました。

■上石津郷土資料館

車庫建築事務所が設計監理した建築で1993(平成5)年に開館、2004(平成16)年に増築されています。隣接する陣屋跡の長屋門と調和した落ち着いた佇まいが印象的な建築でした。この資料館は江戸時代に木曾三川の治水行政にあたる川通御用を行っていた高木家の陣屋跡(西高木家)に建設されています。高木家に残された文書の一部、古地図なども

企画展示されており見どころ満載の施設です。個人的に興味を惹かれたのは自然展示室にあった動植物コーナーです。上石津域内に生息する野生動物、鳥類などの剥製が展示されているのですが、その多種多様さ、剥製の精巧さに目を惹かれました。またの機会にじっくりと見学に行ってみようと思います。

■上石津の里山風景、石垣跡

上石津資料館から東を見ると素晴らしい里山風景が見渡せます。南北につながる養老山脈、山沿いに広がる田畑・集落、その間を揖斐川水系の牧田川が流れます。また、段丘の道沿いに城郭を思わせる立派な石垣が当時のまま残されており、一部は現在の民家の擁壁として使われていました。昨今、古い石垣を残していくことは難しいと思われませんが、過去と現在をつなぐこの石垣はぜひ後世に残してほしいものです。

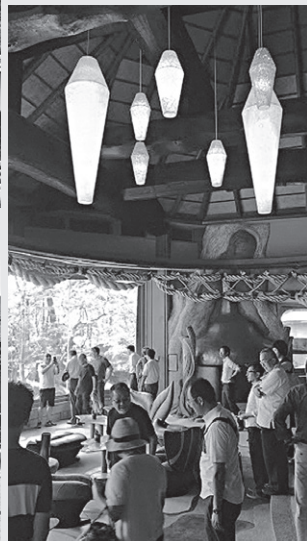
■日本昭和音楽村

三重県いなべ市の県境にある水嶺湖(打上調整池)の湖畔にある音響ホール、野外ステージ、コテージなどがある滞在型の音楽活動施設です。大衆音楽の父といわれる「江口夜詩」が上石津出身のため、江口夜詩記念館が併設されています。この記念館は都市造形研究所が設計監理した建築でRCと木造の混構造です。ホワイエの構造に特徴があり、外観は石貼りの重厚な建築物でした。周囲の豊かな自然と調和のとれた建築群は音楽合宿などには最適だと感じました。その後、加登屋旅館へ向かい役員会、懇親会を行いました。食事は鮎のコース料理で塩焼き、天ぷら、刺身、甘露煮、茶漬けなど全てが鮎づくし、鮎の内臓を使った塩辛「うるか」という珍味もいただきました。

猛暑日の持ち出し役員会でしたが参加された皆様方には岐阜大垣の里山、上石津の魅力を存分に味わっていただけたのではないかと思います。



左上 | 大橋家外観
左下 | 野原邸外観と庭園に使用される巨石群
右下 | 野原邸内観ホール



災害後を考える「復興住宅」・「仮設住宅」視察

現在、三重地域会では、東海支部と三重県との間で防災協定を結ぶべく協議を重ねていますが、その中で県の防災対策部には復興を担当する部署がないということを知りました。そこで、2016年に三重地域会で開催した建築文化シンポジウムにパネラーとして参加いただいた、元JIA副会長の辺見美津男氏にご協力をお願いし、8月28日から29日の2日間、復興住宅の視察を主目的として福島県に研修に行くことになりました。

1日目、東北新幹線で郡山へ。まずは郡山市内初の「認定こども園さいこん」を見学しました。あの未曾有の大震災から7年半が経ちますが、福島県と被害にあった東北の他県とでは事情が違います。第一原発のある双葉郡は6町2村で、その内富岡町、双葉町、大熊町などは一部を除いてまだに帰宅困難地域です。また、帰宅可能となった後でも住民のほとんどが戻っていない町もあります。今回見学させていただいた「こども園さいこん」もその富岡町から避難された施設でした。

白河市の辺見氏の事務所に移動し、震災から今日に至るまでの活動について聞くことができました。復興公営住宅の建設が進むと共に仮設住宅の取り壊しが始まっています。本来、仮基礎の仮設住宅には長く住んでいられません。経済的に自立でき

なくなってしまうといった実情もあります。来年3月には、帰宅困難地域のための仮設住宅も有料になるそうです。

いわき市に建つ復興公営住宅のプロポーザルについても詳しく聞くことができました。地元高校生や建設業者との共同による取組計画で、地域の桧や杉を利用し、景観や周辺環境に配慮したデザインや高齢者を含む多様な世代の入居者への配慮など、ハウスメーカーとは明らかに違ったコンセプトで、採用されたのは当然のことだと感じました。

2日目にいわき市に移動し、それらの復興住宅を実際に見学することができました。辺見氏の説明の通り、被災者しか入居できないなどの縛りがあるためか、空き家が目立ちました。よく考えられたコミュニティのための小道やランドスケープも数人の高齢者を見かけたくらいで、その日の曇天もあって少し物悲しくなりました。

広野町に移動し、建設中のふたば未来学園を見学後、いわき市に戻り、安藤邦廣氏が設計された板倉工法の仮設住宅を見学に行きました。ちょうど解体されている様

米蔵を改装した
辺見さんの事務所での懇親会



いわき市の復興住宅（写真提供：辺見美津男設計室）

子を見ることができましたが、丁寧に解体された80%近くの部材が復興住宅に再利用されると聞き、大変驚くとともに、「仮設住宅」についてあらためて考えさせられました。

今回の視察は実に濃い内容となり、ここで全てについて書き尽くすことができず残念ですが、古い米蔵を改築された辺見事務所の素敵な空間で、美味しい料理とお酒をいただきながら、スタッフの皆さんと大いに語り合ったことは大変良い思い出になりました。

いろいろとお世話になり、本当にありがとうございました。心からお礼を申し上げます。



豊田由紀美 (JIA 三重) |
Y's 建築設計事務所



ヨーロッパの絶景とアジアのまちなみ

今期第2回目となるJIA塾は8月9日に開催され、JIA静岡地域会の正会員の伊久美氏と塩見寛・高島ゆかり夫妻からそれぞれの旅行体験について紹介いただきました。

第1部は、伊久美氏に「ヨーロッパの絶景-(and小さな村を訪ねて)」と題してお話いただきました。北イタリアのドロミティ、カステリッチョ、ナルニ、トレヴィイ、パニカレ、トスカーナなどの大自然と村々が織りなす感動的な絶景とそこに生きる人々の生活を建築的な視点



スライドで現地の風景を見ながら解説を聞いた

から垣間見るという趣向で説明していただき、観光気分を楽しむことができました。Stマダレナ (Fuenes谷) の幻想的な谷間の小さな礼拝堂などは、力強い大自然の中に礼拝堂があることによって美しさが際立つ印象的な風景でした。

第2部「アジアのまちなみ」では、塩見寛氏が訪れたインドのヴァーラーナシーとベトナムのホイアンの人々の生活やまちなみについて、塩見氏ならではの解説をしていただきました。ヴァーラーナシーはガンジス川沿いに位置するヒンドゥー教の一大聖地である宗教都市で、ガンジス川と朝日の関係から西河岸のみ発展しており、川沿いのガートでは、建築と一体となり火葬場を含め、すべての生活の営みがそこで行われているそうです。伝統的住居については中庭と伽藍などの配置方法が遮熱・断熱・通風・採光の観点から決まって

おり、50度近くになる高温多湿な環境をいかに和らげるかが非常に考えられている造りになっていました。

ベトナムのホイアンの古い町並みは世界遺産登録をされていますが、日本人がつくったとされる来遠橋 (通称「日本橋」) など、さまざまな部分で日本との密接な関係があるとのことでした。建物も、日本の町屋とほとんど造りが同じであり、路地なども存在するため非常に興味深く、一度は訪れてみたいと強く感じました。

今回、伊久美氏、塩見氏にそれぞれの旅行体験のお話をいただき、各地域の面白さに加え視点の違いによる新鮮さを感じ、非常に有意義な時間を過ごすことができました。



大橋康孝 (JIA静岡) | 高橋茂弥建築設計事務所

実用的な木部塗装研修

7月13日、オスモ&エーデル名古屋ショールームにて、「木と塗装」と題する木部塗料についての研修を行いました。講師はオスモ&エーデルの大黒氏です。

本題に入る前に、木の素晴らしいところと弱点を確認。木材保護塗料の必要性をその仕組みから説明していただき、木の仕上げには塗装が不可欠だと基礎固めをされました。

次に国交省木造工事標準仕様書にある3



各塗料、樹種別の塗りサンプルを、手にとって確認できた

つの略号WP塗りUC塗りST塗りの解説です。施工要領と規定されている耐久性能の基準を説明いただきました。著名メーカー3社の製品を取り上げて、それぞれの特性とメリット・デメリットを分析した内容で、略号の示す仕様の違いと各社塗料の特性を具体的な事象での比較でお話いただき、より深い理解につながったように思います。

会員からも、あいまいだった塗料の使い分けや意図する塗装をきちんと表記するための質問が多く出されて、実効性の高いやり取りがありました。

続いて木の塗装の施工時の注意点について、木材の含水率の確認の重要性、雨などで濡れた際の対応、塗装下地の基本的な仕様とそれに応じた塗料の吸い込み量の違い、塗

料の乾きが悪いときの原因や対策を講義いただきました。

古材塗装時の注意点では、生地を出すケレンが不可欠なこと、浸透量が大きく塗布量が多くなることを具体的な数値で説明されました。各塗料、樹種別の塗りサンプルを、手にとって塗装面を確認することで、樹種の違いによる塗料の選び方や施工時の注意が実感を持って学習できました。また塗料の造膜・浸透・半浸透の種類について、その構造的な違いが耐候性や補修の難易に出ることの納得のいく理解が得られました。現場対応になりがちな塗装についての知識の整理に役立つ研修でした



服部昌也 (JIA三重) | 八武組

建築をつくるときに問いと答えはどこにあるの？

7月12日は暑い日であったが、時間に余裕があったため、大曾根から繁華街を歩いて会場まで歩いてみた。真新しい名城大学のナゴヤドーム前キャンパスはインスタ映えする芝生の眩しいスロープで校舎が連結されている構成で「こんな大学で学びたい!」というわかりやすい現代建築だ。今日の講師は名古屋の若手建築家の代表である吉村昭範さん。よく有名建築家に「名古屋は建築家不毛の地だったけど最近若手が頑張っているね」と言われる。たしかに吉村世代が最近では雑誌「新建築」の常連になって名古屋の建築界を盛り上げてくれている。ただ、住宅中心の活動であり公共建築へのチャンスが少ない

ことが課題となっている。これは個人では難題で、JIAのような職能団体に期待して活動していくしかない。また、建築ジャーナリズムから見たときに「東京以外」と見られないようにJIAの支部がプラットフォームとなり自前の評価軸を持たないと地域の建築文化は育たないだろう。そのために東海の建築家は「ARCHITECT」を生かしてきたと言えるだろう。

このレクチャーは学部1年生など低学年が多いためタイトルは「今までの受験勉強」と「これからの学び」の違いを意識したものであった。吉村さんの早稲田時代の環境や姿勢、古谷誠章氏の研究室での体験、建築家鈴木了二氏との出会いなどフランクな先輩といった

口調で話された。大学時代の建築家との出会いがその後の建築家としての人生をつくっていくのだとあらためて実感した。建築家と言われるには問題を自分で発見することが問われ、「コンテキスト」を読むことの重要性を繰り返しながら、これから学生たちがどんな姿勢で学んでいったら良いのかを丁寧に話していた。JIAでのきれいなチラシは吉村さんのデザインが原型だとわかり、年上の私も充分楽しめる内容の濃いレクチャーであった。そういえば奥さんの話題が出ませんでしたね。

吉元 学 (JIA 愛知) |
ワーク・キューブ



学生の声

「建築をつくるときに問いと答えはどこにあるの?」。レクチャーの冒頭で投げかけられた言葉に少しはっとした。例えば、普段の設計課題では私も含め、学生たちが毎週のエスキスを受け、決められた期限までに決められた成果物を提出し、最終講評が行われ点数化される。これはある意味で「儀式」なのではないかと思う瞬間がたまにある。その中で、建築を学ぶモチベーションや目指すべきものを無自覚のうちに見失っていたのではないかということに気付かされた。

「建築をつくる」と言われても、今の私には実際に建築を建てるノウハウも機会もない。単なる一学生として、決められた課題を決められた期間内で取り組むだけである。取り組むというよりも「こなす」という表現の方がしっくりくるのかもしれない。しかし、吉村さんは設計課題や卒業設計を「こなす」ではなく、「取り組む」そして「建築をつくっている」ように感じた。それは、レクチャーの冒頭にあったように、吉村さん自身が「建築をつくるときに問いとその答え」がどこにあるのか、また、どこに問いや答えを導き出していきべきか、常に考えながら建築に向き合ってきたからではないか。

まず、吉村さんの卒業設計では、建築をつくる上で「リアリティは何か」という問いを自分自身に投げかけ、学生の課題とは「届かない手紙を書いている感じ」という気付きをもとに、実際に建つものというよりも卒業設計でしかできないことをやってやろうという目標にたどりついた。そして、吉村さんなりの答え解法として、都市の見方を変え、「ここに人がいるかもしれない空間」が時間とともに変わっていくという提案にたどりついた。その提案をする上で、具体的な平面図や断面図はないけれども、グラフィックによるプレゼンテーションをした。その際に、当時の講評をしていた先生の中の1人が「図面がないから」という理由で0点をつけたという。吉村さんは、その作品に対して自分の中で納得していて毅然としている印象を受けた。

私はこの話をする吉村さんの姿に感銘を受けた。そして自身に問いかけた。設計課題に取り組む上で「評価を得たい」、「先生たちや周りの学生、みんなが良いねと言ってくれるような作品をつくりたい」と心のどこかで思っていないか。「決められたものを、他人から求められているものをつくりたい」と思っていないか。建築をつくる

ときの問いや答えはすでに用意されていると思込み、自分で問いや答えを探すことを放棄していないか。私自身が、設計課題に取り組む上で、苦しいと思うときは度々あった。しかし、それは「建築をつくる上で問いや答えは用意されていて、その用意された答えにたどりつかないといけない」という自身の勝手な思込みによる束縛だったと気付いた。

本当に必要なことは、自分自身で問いを見つけ、納得がいく答えを導き出すことだと気付いた。私は現在3年生だが、これから先何十年と建築設計と向き合っていきたいと思っている。その上で「真摯さ」を大切にしていきたいと以前から公言していた。しかし、その真摯さとは何かについて言語化できていなかった面がある。今回のレクチャーを通して、私の中で、「真摯に向き合う」とは、自分自身で問いと答えを追求していくことだと気付かされた。

日々、建築を学ぶ上で進化していけるように、自問自答を繰り返していきたい。

池本祥子 | 名古屋市立大学3年

「気づきの瞬間」に出会う楽しみ

愛知地域会では、事業委員会と三河地区会の合同事業として、数年前より愛知県東部の豊橋市内で15年の実績がある「とよはし都市型アートイベントSebone (セボネ)」へ参加協力を行っている。

「Sebone」とは、豊橋駅前の「水上ビル」と呼ばれる農業用水の水路上に建築された商店街ビル群が、ひとの「背骨」のように市街地を貫いていることから、イベントを企画したメンバーの若者たちが命名したもの。今ではこの名前前で市民に浸透し、夏の風物イベントとして定着している。

その連携企画として、僕自身が主体となって行っている「お店をつくらう!～小さなまちづくりプロジェクト～」という小学校向けのワークショップがあり、今年で13年目になる。初年度は、別企画の作品展だったのだが、もっと面白い展示方法があるはずと思い立て、翌年から、まちなかの2つの小学校に企画を持ち込んだことがきっかけだった。当初は(今でも)、専門的な児童教育の知識もたず、探り探りの危なっかしいものだったが、現在では、両小学校の一部授業に組み入れられて、4年生の図工の授業にお邪魔するのも恒例になった。作品の展示会場も一昨年から豊橋駅前の「穂の国とよはし芸術劇場PLAT (プラット)」に移り、劇場ホールを使ったアート作品展示という新たなチャレンジも行っている。美術館やギャラリーではできない映像との組み合わせや、照明を変化させる

展示にトライしている。これには、劇場スタッフや照明技術の方々にとっても一定の刺激になっているようで、(忙しいであろう)時間を割いて、驚くほど協力的にかかわって、楽しんでくれているように思う。

そんな中で、JIA 愛知から事業委員会が中心になって、豊橋での活動に協力していただけることになり、まずは、2015～2016年には、建築ワークショップ企画として、「Sebone」へ出展。親子向けに「段ボールカード」による立体制作のワークショップを行った。昨年は、「お店をつくらう!」企画への全面協力という形で、準備から設営展示までの2段階の企画を事業化している。

第一弾は、夏休み最初の週に小学校で「お店をつくらう!」の作品づくりのサポートをするサマーチャレンジスクールへの協力。今年は、梅雨明けも早く、異常な猛暑続き。毎年、酷暑の体育館での工作サポートは、汗だく、水分補給をしながらの、大変なワークショップとなるが、子どもたちの豊かな発想に驚いたり、反面、こんなこともできるよ、こうすればいいじゃん!と、こちらからアドバイスをしたり。そんなコミュニケーションを通して、「そうかつ!」って顔で、勝手につくっていた障壁や、できない、やっちゃいけないと思い込んでいたことをブレイクスルーする子どもたちの気づきの瞬間に出会うのがなよりの楽しみとなっている。もちろん、仕事のスキルを生かして、子どもたちのムズカシイ要望に応えた時の彼らか

1年生のテーマ：たべものやさん
八つ切り画用紙を横向きに切って絵をかいてね!
お母さんやパパやさんに、おかしやさん、おすしやさんにレストランに、あややさん、なにががいいかな?

2年生のテーマ：松山・新川デパート
八つ切り画用紙を横向きに切って絵をかいてね!
デパートにはお店がいっぱい、ふくやさん、ほんやさん、おもちゃやさん、パスタやさん、時計やさん、どんなお店があるかな? みんなで話しあって、新しいデパートをかませいさせよう!

3年生のテーマ：見たこともないお店
四つ切り画用紙を横向きに切って絵をかいてね!
こんなお店があるの!?こんなものが売ってるの!? みんながびっくりするようなお店をかませよう!

4・5・6年生のテーマ：自由にまちを作ろう!
楽しいまちの「あったらいいな!」って、なんだろう?
こんなお店があったらいいな!こんな公園があったらいいな!
自由に考えてつくろう!①②③からテーマを決めてもいいよ。
①【夏】を売るお店 ②【とよはし】を売るお店 ③まちなか図書館

ポードの上に工作するよ!
★つなげて大きなお店にしたり、かきねで2階建てのお店にしてみよう!
★お隣に迷惑をかせないよ!
★地面に強い建物にする。
★材料は自由。
好きなものを作ろう!

4・5・6年生対象「お店をつくらう!」サマースクール
【松山小学校】7月24日(火)・25日(水)午前9時～12時
【新川小学校】7月26日(木)午前9時～12時
※各小学校の体育館で開催します。

チラシ(ウラ)。学年ごとにテーマを設定する

らの「尊敬のまなざし」もまざらでもない。

今年のサマーチャレンジスクールは、7月24～25日の2日間に松山小学校、翌26日には新川小学校の計3日間、午前中3時間の活動。JIAメンバーのほかには、Sebone実行委員会メンバーや地元商店街の有志、愛知大学のメディア芸術専攻(山田晋平ゼミ)の学生さんなどが参加してくれました。各日50名を超える生徒たちが参加して、完成近くまで進む子もいれば、悩んでなかなか進まない子もいて、さまざまです。最後のところが肝心なので、「完成した」、「もうできた!」と言って見せに来る子に対して、「まだまだ、もっとできるっ!」と突き返すのは、自身が学生時代に、「愛」を持って再提出を命じていただいた恩師の方々の思いに通じます。

第二弾は、「Sebone」当日へ向けての設営作業、審査や展示の様子、そして表彰式での一幕についてレポートします。こちらは、来月本誌11月号にて。



松山小でのサマースクールワークショップの様子。「建築家+」に載った2人が、今年も参加してくれました



工作のサポートをカウンターで受け付けます。ムズカシイ要求ばかり…汗だくです

黒野有一郎 (JIA 愛知) | 建築クロノ



4つの住宅を巡る

東海住宅賞など、さまざまな賞を取った住宅4軒を一日で見るというツアーを住研と近畿支部住宅部会とで行いました。参加人数は54名。委員長になってから初めてのイベントで務まるかどうかの不安もありましたが無事に終わられて良かったです。朝は名古屋国際センターに集合。近畿支部の方々が交通渋滞に巻き込まれて大幅な遅刻はあったものの、逆にこれが功を奏して東海の人々と近畿の人々が交互に住宅を見ていくという形をとることができました。何せ見るのは普通の住宅です。50人を超える人が一気に見られるわけがない。無茶苦茶に暑い日だったので(名古屋は連日39度とかそういう日)外観ばかり見ていただくのもちょっと申し訳なかったのですが、皆さま辛抱強くご一緒していただきました。

まず最初はワーク・キューブの吉元学さんの「nagono no mise」。すでにJIAの住研の方々には馴染みのお家です。僕も訪れたことはあったんですが、今回ははじめて温室にあるスリバチを愛でることができました。入って触って座ってみる。なんともいえないゆったりとしたムードが漂う不思議な場所になっています。

写真撮影：朴の木写真室 三谷勇太



「nagono no mise」のスリバチ（設計：ワーク・キューブ）

特にその場の用途は決まっていなくていいことでした。来た人の想像と使い方に任せられているのでしょうか。スリバチはその形状から人々が自然と向き合う形になります。意図されたかどうかはわかりませんが集まる場所の原型とはこういうものではないかなと、考えながらしばし佇んでいました。

その次は佐々木勝敏さんの「豎の家」。外は黒くて大きな木の箱で、言われなければ住宅とはわからないかも。採光とかどうなんだろうと思いつつ入って見たのですが、電気も付けていないのに全く問題のない明るさがありました。大きな三層分くらいある吹き抜けと、その上のガラスから入ってくる光が印象的です。内部は部屋同士を分ける扉もなくて空間はひとつながり。外観からしてもそんなに大きな家ではないはずなのですが十分な伸びやかさを感じました。空調もあまり使わずとも快適に過ごせること。こういう家に住めたら楽しいだろうなあ…。

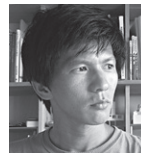
服部信康さんの「長浦の家」。ここは先程の佐々木さんの家とは対照的に小さな空間がいくつもつながる構成です。車椅子を使うご家族がいらっしたようで、バリアフリーの平

屋になっています。大きな空間もなく吹き抜けもなく、天井の高さも抑さえられている。でもそこかしこに見られる中庭の緑であったり、外気を緩やかにささげる縦格子であったりが空間に落ち着きを与えています。何と言いましようか、大それたことをしなくても空間はできるんですよと建築が教えてくれた気がします。訪れている間、お施主さんと服部さんがずっと楽しそうに語ってらっしゃって、それもまたなんとも楽しげな風景になっていました。

最後にmA-styleさんの「光庭の棲」。すごいのは何よりも家の中に庭があるんです。外じゃなくて家の中です。横幅いっぱい伸びた玄関をくぐったらゴロゴロした石と庭木が出迎えてくれます。でも不思議なことに違和感はありません。空間との調和があります。ただ発想としては度肝を抜かれますね。どうしてこうなったのか川本さんにお尋ねしたのですが、敷地が傾斜地であって、構想の最初の頃からこのようなアイデアを進めていたとのことでした。全体は庭を中心にスキップフロアになっていて、リビングとダイニング、寝室が周囲を囲みます。驚きの家でした。

4つの異なる家を見ることができて幸せでした。いろんな考え方があるし住まい方があります。それをひとつひとつ実感しながら巡ることができました。なかなか住宅の実作って見られる機会がないものです。今回の企画も発表してすぐに満員御礼となってしまったぐらいです。オープンハウスならまだしも、お住まいになってからはプライバシーもあるので公開するのは難しいものがあります。にもかかわらず快くお引き受けいただいた建築家の方々、そしてお住まいになっておられる施主の皆さまに心より御礼申し上げます。またいつか、このような機会を設けることができたかと考えております。

竹中アシュ（JIA 愛知） | 竹中設計事務所アシュ



「豎の家」（設計：佐々木勝敏建築設計事務所）

「本部委員会体制の見直し」、「各支部の財務分析」の協議が本格化する！

8月29日に建築家会館にて第250回理事会が開催されました。5月、6月はオブザーバー参加であり、今回が支部長になって初めての正式参加でした。協議事項として、「JIA本部委員会の再編」や「本部、支部の財務分析と検討について」などがあり、どちらも今後のJIAの在り方を考える上でとても重要な協議であると感じました。今後は、しっかりと東海支部の意見を伝えるべく内容の精査を行いたいと思います。



本部理事 矢田義典

【審議事項】

1. 入退会承認の件 (浅尾事務局長)

減少傾向は止められないように感じます。今回も微減(前会理事会より9名減少)しており、会員総数3,000名は時間の問題です。会員の年代構成を考えれば、ある程度までの減少は止むを得ない感じがありますが、若手建築家がJIAに入らない理由などを、しっかりと検討する必要があります。東海支部関係では杉本憲治会員(正会員)、久田佳明会員(学生会員)の入会が承認され、佐藤隆史会員(正会員)、大川孝信会員(正会員)の退会、瀧下英明会員の死亡退会が承認されています。

※ 8月3日の書面評決現在 正会員数 3,684名 →承認

2. 委員会委員・全国会議委員委嘱承認の件 (筒井専務理事)

- ① 選挙管理委員会委員承認
- ② JIAまちづくり会議委員承認
- ③ 教育表彰委員会新人賞タスクフォース

「JIAまちづくり会議委員承認」の件で、黒野有一郎会員(愛知)の委員委嘱が承認されています。前委員の尾関利勝会員(愛知)には感謝申し上げるとともに黒野新委員には若さを武器にJIAまちづくり会議での活躍を期待しています。また、「教育表彰委員会新人賞タスクフォース」の中で3期を超えて委員に就任されている方がおり、クレームが出ています。東海支部でも長期に渡り委員、委員長に就任されている方については交代の検討に着手したい。

3. CPD・WebプログラムのJAEIC動画配信システムへの提供に関する取り決め承認の件 (浅尾事務局長)

JAEICへの動画配信システムへの提供に関する取決めが承認されています。従来通り、JIA会員は無料で動画を見ることが出来ます。この取り決めは非常にメリットが多く、非会員は動画視聴が有料であるため、JIAへの入会促進が見込めます。

【協議事項】

1. 本部委員会体制見直しについて (上浪総務委員長)

2019年6月を目途に本部委員会体制の再編を完了し、2019年からの実行を目指しています。ポイントとしては、1.「教育表彰委員会の再編」、2.「JIAのブランディング」、3.「フェロシップ委員会の位置付け」の3つとなります。特に、教育表彰委員会の再編の中では、「全国学生コンクールの位置付けを明確にする」といった項目があり、東海支部

としては看過できない部分です。早急に東海支部の意見をまとめ本部に回答したいと考えています。ただ、現実的には非常に大切な事業でもあるため慎重に協議を重ねたいと思います。

2. 財務委員会からの財務分析報告と検討について (左財務委員長)

本部、支部の財務分析の途中経過の報告があり、各支部より意見を徴収したいとの話がありました。個人的には現在の配分比率である、本部60%:支部40%の見直しを行わない限り各支部の財務健全化は難しいと思います。支部、地域会が存在してこそJIAであることを本部は理解すべきだと感じています。東海支部の財務は10支部の中では非常に優良ですが、決して健全な財務状況といえません。

【報告事項】

1. 職責等検討特別委員会終了報告 (筒井専務理事)

2018年度の本部総会を経て、職責等検討特別委員会の活動報告が提出されています。内容については本部総会資料で確認済かと思いますが、今回は最小限の危険回避の側面が強く、内容をより良いものにするためには議論の継続が必要だと感じています。

2. アルカジア東京大会収支見込み及び準備状況について (高階アルカジア大会実行特別委員会委員長)

3. JIA建築家大会2018東京の準備状況について (藤沼大会実行委員会委員長)

「ARCASIA東京大会」と「JIA建築家大会2018東京」の準備状況などの説明がありました。特に「JIA建築家大会2018東京」のプログラムである、実施コンペには全国より300を超える応募があったそうです。全国大会におけるプログラムのあるべき姿の一つかと感じました。非会員からの応募が多く、JIAへの入会促進が見込めます。東海支部でも若手建築家に魅力的な実施コンペの実現を検討したいと思いました。

4. JIA公益事業活動助成(2018年度募集)について (左財務委員長)

昨年度までは2回の募集でしたが、今年度は1回となりました。また、助成額も100万円(昨年度350万円)となっています。助成金額の減少は非常に残念に思いました。有益な事業には予算を多少オーバーしても助成すべきかと感じています。

5. 日本建築センター委託業務「事業ユニット」組成について (左財務委員長・高階国際交流委員長)

6. 若手勧誘パンフレット案について (所広報副委員長)

7. 一般社団法人クリーンコンサルタント連合会設立趣意書について (藤沼関東甲信越支部支部長)

8. NPO法人建築文化継承機構報告 (森顧問)

9. 活動及び業務執行状況報告 (筒井専務理事・森顧問)

- ① 建築士法改正要望について
- ② 業務報酬基準(告示15号)改正について
- ③ 後援名義承認の報告(会長専決事項)

10. その他

・九州支部大会in奄美について(川津九州支部支部長)

東海支部役員会報告

『ARCHITECT』を情報提供やアーカイブの場として議論しているが、他にも意味があるとする。頭の中にある「考え」を建築にするのが建築家だが、建築家が建築や頭の中で考えたことを文章化することは建築を理解し発展させていく上でとても重要な要素であり、建築家としての研鑽の場である。皆さん『ARCHITECT』に投稿するときは推敲に推敲を重ねて文章を書いていると思う。少なくとも自分はそうだ。東海支部にこの「日常的な場」があることを考え、生かしていかなければいけない。今後はいろいろな意味があることを考え、今よりも使い倒さないとモッタイナイ。

もう一つ気になることは、フェイスブックやツイッターは情報のスピード化や同時性に優れている。情報伝達だけではなくスピード感のある議論空間になり、いろいろなことがシンクロするかもしれない。だが、この輪に入っていない人が全く参加することができず、仲間内だけの議論になる恐れもある。紙媒体の場合は意外な人の目に触れる偶発性があり、さまざまな視点から議論が膨らむ可能性がある。反面、Webで英語を使用言語とすれば世界と直接つながる可能性もある。東海の建築家の今後に影響を少なからず与えることになる紙媒体とWebのあり方は同時に検討すべきだ。

参考文献：『ウェブで政治を動かす！』津田大介（朝日新書）
『日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で—』水村美苗（筑摩書房）
『感性は感動しない—美術の見方、批評の作法』榎木野衣（教養みらい選書）



吉元 学 (JIA愛知) | ワーク・キューブ

日時：2018年8月3日（金）16：00～17：00

場所：加登屋旅館（大垣市上石津町）

出席者：支部長、本部理事、幹事11名、監査2名、オブザーバー7名

1. 支部長挨拶

本日は時間が1時間ですので、よろしくお願いたします。

2. 報告事項

(1) 支部報告

- ① 第6回 JIA 東海住宅建築賞 2次審査 (7/29) (吉元)
 - ・支部幹事の浅井裕雄さんが大賞を受賞した。
 - ・台風の影響が心配されたが現地審査は無事終了した。
 - ・今後は悪天候などの検討を注意深く行いたい。
 - ・審査の議論が白熱した。今後も継続していきたい。
 - ・来年は入会1年未満の会員の応募料を無料にしたらという意見があった。
- ② 「JIA25年建築選」応募について (矢田)
 - ・現在3件の応募があった。

- ・各地域会の審査員を確認していただきたい。
- ③ 中部建築賞「分担協力金」について (矢田)
 - ・例年のように10万円の協賛金を支出した。
 - ・今年は50周年のため記念シンポジウムを開催する (服部)
 - ④ まちづくり全国会議委員推薦について (澤村)
 - ・現在の尾関利勝さんの任期が切れるため交代する。
 - ・愛知地域会の黒野有一郎さんを推薦する。8月29日の理事会で審議する。
 - ⑤ 災害対策支援ネットワークについて (澤村)
 - ・地域会長以下1～2人を決めてください。
 - ⑥ ARCASIA 東京大会2018「建築未来展」JIA 会員展示 公募について (澤村)
 - ・3件を本部に推薦した。
 - ⑦ 「事業活動助成金」について (8/10入金) (澤村)
 - ・8月中旬に支部へ30万円入金予定、支部へ10万円、愛知地域会へ20万円の配分

3. その他

- ① 逝去 正会員「徳田統也」(愛知) (吉元)
- ② 退会届 正会員「佐藤隆史」「大川孝信」(静岡) (大瀧)
- ③ 転入 正会員「渡部芳久」(愛知) (吉元)

議事

1. 審議事項

- ① 入会申込 正会員「杉本憲治 (すぎもとけんじ)」(愛知) (吉元)
 - 承認された
- ② 第2回 JIA 綱引選手権大会 in 葛城市 (近畿支部) 開催について (矢田)
 - ・参加する事とし、参加者を募集する。
 - ・参加料10,000円について →承認

2. その他

- ① JIA 建築家大会2018東京大会 参加登録開始について (矢田)
 - ・東海支部参加目標は90名
 - ・配分は愛知65名、岐阜・三重5名、静岡15名
- ② 『ARCHITECT』について (中澤)
 - ・『ARCHITECT』存続についての連載がスタートしました。ご意見をお寄せください。
- ③ 現在事務局から一日にメールを4,000人しか送れないこれを10,000人送れるようにする。月あたり3,000円程度費用が増える。

3. 監査意見

服部監査：建築ジャーナルの対応について支部長より建築ジャーナルに申し入れをすべき。

大瀧監査：日独交流のその後の進展については？ 進行中です (矢田)

登録有形文化財

飛騨古川の酒蔵



渡辺酒造店



蒲酒造場



瀬戸川の土蔵



■紹介者コメント

国の重要無形文化財に指定され、毎年4月19-20日に行われる古川祭。19日の夜には、数百人の裸男に担がれた樽の上で直径1m程の大太鼓に若者2人が背中合わせにまたがり、交互にバチを振り下ろす「起し太鼓」。翌日は飛騨の匠の技を結集した屋台がまちを練り歩く「屋台行列」。動と静の対照的な行事で、雪深い飛騨に春を告げる。正月15日には、三寺まいり。高さ2mの雪像ろうそくが雪化粧をした古いまち並みに灯る中、円光寺・真宗寺・本光寺を巡拝する。今では縁結びが叶うお参りとして、和服を着た娘が、良縁祈願の想いを込める。雪の中、瀬戸川沿いの千本ろうそく・とうろう流し、温かな灯りがまちを彩る。

これら伝統行事に欠かせないのが地酒。飛騨古川には、二つの酒蔵がある。渡辺酒造店と蒲酒造場、いずれも壺之町通りに面しており、それぞれ主屋をはじめとする建物が登録有形文化財となっている。

渡辺酒造店は、格子窓が連なる軒先に代表銘柄の「蓬莱」の看板をかかげ、新酒の出来上がりを示す「酒林」を置いた正面玄関。青い暖簾をくぐると、陳列棚に幾種の酒が並び目移りしてしまう。試飲するとさらに迷ってしまう。目的である文化財の建物を拝見し、通りに戻ると司馬遼太郎の歌碑と杜氏のブロンズ像が設置されている。先に進めば、蒲酒造場である。同じく「白真弓」の看板と酒林が掛けられた入口。玄関脇の座敷には神棚の下、屏風の前

に凛とした花が活けられていた。瀬戸川沿いの白壁土蔵街の一角として建つ文庫蔵は、古川を象徴する景観となっている。

◎渡辺家住宅

所在地：岐阜県飛騨市古川町壺之町7-7
問合せ先：TEL 0577-73-3311
文化財等指定：登録有形文化財 主屋・漬物蔵・上手蔵・中蔵・酒蔵 (21-0061 ~ 21-0065)

◎蒲酒造場

所在地：岐阜県飛騨市古川町壺之町6-6
問合せ先：TEL 0577-73-3333
文化財指定等：登録有形文化財 主屋・袖蔵・文庫蔵・仕込蔵一・仕込蔵二 (21-0130 ~ 21-0134)



山田正博 (JIA 愛知) | 建築計画工房

データ発掘 (お気に入りの歴史的環境調査)

ライブラリーカフェ&バル 庄九郎(旧竹田家はなれ)

■発掘者のコメント

名古屋駅から名鉄車で約20分、江戸時代以後の旧東海道のまち並みが残る有松に昨年2月、築170年以上の歴史ある建物を改造したカフェがオープンしました。場所は街道の西側で有松駅から5分程度、有松絞の製造販売を営む竹田嘉兵衛商店(名古屋指定文化財)の1つ手前にある駐車場の奥に、有松の歴史を物語る「はなれ」として佇んでいます。江戸時代初期に有松の地を開拓したメンバーの一人で、特産物「有松絞」を最初に創出した「竹田庄九郎」本家の屋敷群があった場所です。

この建物は当初街道沿の「店舗」と接客目的の書院「申々居」(注1)とをつなぐ待合的な機能を持った建物かと想定されます。(注2)

その後隣接する竹田嘉兵衛商店屋敷群の一部として編入、大正期には当主の隠居屋敷としての使用時期も経て、近年空家のまま放置されていたのを「コンソーシアム有松」理事長中村倭子さんの奮起により、有松を訪れた方たちの休憩を兼ねたライブラリーカフェとして改修されました。(注3)

ここでは有松絞を実物作品や映像を通してPRし、絞作家の故竹田耕三氏の収集された貴重な国内外の絞りの文献や資料なども展示されています。

建物は6畳+押入と5畳+床の間の和室2間に外周鍵の手に縁側が回り、それに付属の部屋がつながる小さな規模ながら、柱は細く断面四隅が丸太面の面皮柱を使うなど数寄屋の細やかな造作が施され、優美な印象を与える建物です。カフェに改造した際には手前6畳は床板張り、天井板を撤去し小屋組を現わしにしてボリュームある空間とし、奥の5畳はほとんど手を加えずに当初の優しさが残る空間としてその対比が楽しめます。

お店では、昼のランチ・午後のカフェ・夜のバルと時間帯によって、花器・展示品・家具・照明など室礼でその雰囲気の違いも楽しめ、さらに提供される料理・飲料なども店に似合うように工夫されていますので、有松での街道まち歩きをされた際の休憩先として一度訪れてみる価値は大きいです。

取材に当たり、前出の中村理事長、山口ゆずみ事務局長にはお世話になりましたこと感謝申し上げます。

(注1)江戸時代に建てられた竹田庄九郎家の書院。今は同じ緑区大高に有る春江院(しゅんこういん)の書院として移築保存されている。(登録有形文化財)
(注2)資料「竹田嘉兵衛氏宅慶応家並調図」、竹田庄九郎家保管の「備前園」(作小田切春江)
(注3)補足:平成28(2016)年度なごや歴史的建造物保存活用工事助成(クラウドファンディング利用型)第1号利用



左上 | カフェ正面 (右玄関)
左下 | カフェ内部 (奥5畳)
右 | カフェ内部 (手前6畳スペース)



所在地：名古屋市長区有松1804番地
構造規模：木造平屋建て、約58㎡
建築年月：江戸時代後期。改修工事中に建物床の間の床板裏面から弘化3(1846)年の墨書発見、その時代若しくはそれ以前と想定される
文化財指定等：重要伝統的建造物群保存地区内、名古屋市登録地域建造物資産 第150号 (2016年登録)



野口和樹 (JIA 愛知) | 野口良一設計事務所

連続環境セミナー第2クール2018～2019

バイオクリマティックデザイン五輪書

JIA 愛知地域会住宅研究会主催

連続環境セミナー第1クールでは、改正省エネ法の施行を控え建築の環境性能の基礎を学びました。激しくなる気候を目の当たりにする昨今、全国一律の規制でこれらに対応できるのでしょうか。一方で地域の気候や風土性を、建築の豊かさとして織り込んでゆく設計マインドも求められています。長い歴史の中で気候変動は繰り返されましたが、その過程で先人が育んだ知恵や工夫は受け継がれてきました。ローカルの素材や植生を活かした地域らしい素敵なデザインも改めて学んでみたいところです。また、便利で快適になった環境の中で私たちヒトはどのような生物的進化・変化をしており今後の住環境はどうあるべきなのでしょう。絶滅危惧技術となりつつある地域の知恵を、その道に精通した講師のお話と、現地での体感・経験を通して、東海地方におけるバイオクリマティックデザインのこれからをあらためて考えてみたいと思います。

※バイオクリマティックデザインとは、バイオ（ヒトを含む生物）とクリマティック（気候、風土）との関係を考え、よりよい環境形成を目指すための手法です。

<1章 地の巻>

「東海地方の土はよい」と言われるのはなぜ!?

石塚晋一：東海地域の土と地層、やきもの文化の地理と歴史

松木憲司：左官技術の伝統と粋を現代に生かす術

日時：2018年10月13日（土）開演時間調整中

場所：INAXライブミュージアム

どろんこ館 タイル博物館 講義室

（愛知県常滑市奥栄町1-130）

アクセス：名鉄線「常滑駅」または中部国際空港より

知多バス「知多半田駅」行き、

「INAXライブミュージアム前」下車、徒歩2分

<第2章 水の巻>

沈降する濃尾平野を舞台に木曾三川がもたらしてきた災いと恵み

サバイバル術を歴史から学ぶ

久保田稔：木曾三川と輪中の成り立ちについて

諸戸 靖：水と共に生きる術について

日時：2018年11月18日（日）開演時間調整中

場所：大名古屋ビルヂング12F

TOTOテクニカルセンター名古屋

（名古屋市中村区名駅3-28-12）

地域会だより

<東海支部>

9/13～15 JIA 建築家大会2018東京

<静岡>

8/9 静岡地域会拡大役員会・納涼会

8/9 第2回JIA塾の開催

9/21 静岡地域会役員会の開催

10/5 建築ウォッチング「建築見学バスツアー」の開催

<愛知>

9/8 JIA北福岡地域会の若手建築家との交流会

9/14 NAGOYA Archi Fes連続レクチャー第5回「栗原健太郎」

9/28～1/25 名市大・JIA2018年後期授業「建築家の仕事」

9/29 住宅研究会「連続環境セミナー」第1回

10/13 住宅研究会「連続環境セミナー」第2回

10/18 事業委員会「猪高小学校建築教室」第1回

10/18 NAGOYA Archi Fes 連続レクチャー「田中義彰」

10/26 法人協力会「CPD研修」

<岐阜>

9/20 JIA 岐阜 第5回役員会

10/13 JIAの窓「手嶋保氏講演会」

<三重>

8/28～29 福島県復興視察 研修旅行

9月 第4回三重県とJIA東海支部との防災協定締結に関する協議（三重県庁）

9/21 会員研修2・福島県復興視察報告会

11/7 建築ウォッチング尾鷲ツアー

弔りこころ、大切な葬儀

葬儀のこと、お応えします。

一柳の葬儀は、各種・価格を段階的に用意いたし、ご希望される予算に合わせてお見積りいたします。宗教・宗派、葬儀規模の大小にかかわらず、全ての葬儀に丁寧にお応えしています。

いちやなぎ斎場は、365日・24時間、いつでも病院・施設等から直接入れます。

いちやなぎ中央斎場

名古屋市千種区千種二丁目19番1号
TEL (052) 745-1212

いちやなぎ野並斎場

名古屋市天白区野並三丁目538番1号
TEL (052) 899-0111

◆葬儀のお申し込み◆お問い合わせ◆事前相談は

TEL.052-251-9296

365日・24時間 一柳のスタッフが対応いたします!

日本建築家協会東海支部 特約店



一柳葬具總本店

<http://www.ichianagi-sogou.co.jp>

イチヤナギ倶楽部

- 入会金1万円のみで掛金不要、基本価格の2割引と交通事故傷害保険の特典取得
- 相続、遺言、後見制度など相談先の紹介が受けられます



編集後記

●今号も冒頭に、「緊急連載『ARCHITECT』は必要ですか?」との、われらが会報誌の存続を問うセンセーショナルな一連の問題提起が載っています。長年に渡り愛知のブリテン(支部の会報)委員会に所属し、その委員長も経験して他支部交流時にも活動紹介・意義発信してきた身には重くて辛い議論です。電子情報全盛の世となつてなお、(だからこそ?)私は紙媒体機関誌が紡ぐ会員交流・結束の使命の重さを率直には感じています。

今号では支部長から「瀕死の状態」の理由を、「予算」対策と「原稿」内容の2点に集約した発議がなされています。前者は「入りを図り出るを制す」知恵の結集、後者は会員個々の参画意欲アップが原動力と言えませんが、

そのためにも原点回帰の存廃論議を深く広範にすべき時宜かもしれません。「予算」問題に絡み、理事会レポート中にも見える支部財務検討の財務委員会提起への取り組み・応答も支部の急務かと思われま。 (鈴木利明)

●毎月の表紙を見るたびに「縮尺に合った図面を描きなさい」という師匠の言葉を思い出します。毎回、図面を撮影してくれている牧君には「技術屋の感性をくすぐるような処を撮ってね」とお願いしています。牧君、ご苦労様です。毎回、楽しませてもらっています、ありがとうございます。さて、『ARCHITECT』の存続に対する議論が活発になり、11月にはアンケートが実施される予定です。『ARCHITECT』の存続に対する其の精神態度が積極か、消極かということとその結論の成否が決定します。「必要だ」という意思の力を信じるばかりです。

(城戸康近)

ARCHITECT

第361号

発行日 2018.10.1 (毎月1回発行)

定価 380円 (税込み)

発行責任者 矢田義典

編集責任者 中澤賢一

編集 東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
建築ジャーナル内
ARCHITECT 編集部

名古屋市東区泉 1-1-31 吉泉ビル 703

TEL (052) 971-7479 FAX 951-3130

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052) 263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

<http://www.jia-tokai.org/>